

## クルソン峽



世界的異常気象が報じられている。ドイツに真夏の雪、竜巻、スイスの雹、中国の洪水、チエコの雷などなどで、特にアメリカの大山火事の映像に、「ふと「バチが当たっている」と思った。永遠の強国など存在しない。崩壊は何もテロからではなく、常に自身の奢りから始まる」とは歴史が物語っている。

それにしても洪水は恐ろしい。人類と川の長い付き合いの中で、様々な手は打たれて来た筈だが、天災は人知を越えて起こる。

「入来新能」に感動されて、「ご縁が出来た宮之城の小辻清行さんは、宮之城文化懇談会の会長でもあり、情熱をもって地域の文化高揚に努め

られている。

彼は年一回、一泊の研修旅行を企画。役場のバスを出してもらい、かつて新聞記者として活躍されていた同町出身の石橋通さんの作成した行程で、まず個人では行くこともないだろう史跡や施設を巡るのである。

入来町は宮之城とは合併騒動で別れることが決まったが、去年に続いて今年も声を掛けて頂いた。昨年の懇談会誌のテーマが「川」だったことから、今年は川内川を逆上り、源流近くまで行くのだという。

川内川は何故か私にも特別な思いがある。新婚旅行を兼ねた鹿児島帰省で、夫は先ず母校川内高校を訪れた。川内市は、戦災の焼け野が原から一応の復興がなされていた。夫の通学時は川内川下流の大橋、太平橋は穴だら

けで隙間から流れが覗けたという。見渡せば、春先の濁流が悠々と流れていた。

今は無い宮之城線は川内川に沿って走り、四季の趣があつて、観光的にも価値があつたと思われるが、覆水盆に返らずである。

その後入来町に定住してから、曾木の滝や鶴田ダム、また川沿いに川内市までドライブをした。私は緑多く屈折したこの流れがとても気に入っている。

ある時JR肥薩線でえびのの平原を上から眺め、そこを大きく蛇行している川が川内川と聞いて、随分長い川なのだ知つた。

四年ほど前、秀吉の朝鮮出兵に反乱を起こした梅北国兼を調べに菱刈の資料館を訪れたことがあつた。そこには川内川の氾濫の記録がずらりとあつた。この辺りの川内川は川幅もさほど広くないし、さして起伏もないのに、信じられないような水害の記録であつた。

川内市の氾濫の有様は夫の友達から聞いてはいたが、この川は全くのやんちゃな暴れ川だっ

たのだ。

今年（平成十六年）二月、霧島で「地域起こし団体」の全国大会があつた。「薩摩ブロック」のテーマとしては「川は地域の永遠の大動脈」として川内川を中心に据えた。その時からもつと川内川を知りたいと思つていて矢先でもあつて、夫と懇談会のミニツアーに参加を申し込んだ。

最初に島津義弘と伊東氏の歴史的激戦地、木崎原を見学。バスはいつか舗装されていない山道に入った。がたこと揺られること小一時間。ひたすら森の中を進む。これ以上は車は通行止といった所がクルソン峡であつた。眼前に高い岩山があり、その前を清流がしぶきを上げていた。菊地峡谷より明るい、木曾川の上流にも似た佳峡であつた。河瀬に降り立つてきれいに磨滅した石など拾つた。川内川の源流はまだ其処から十五キロほど先の熊本県の白髪岳と

いうことである。私はいつか歩いて源流をつきとめたいと年甲斐もなく思っていた。

帰ってクルソンという奇妙な名前をドライブ用のマップで探した。川沿いのその道はえびの市と熊本県堺を走っていた。鳥居のマークがあり「狗留孫神社」そして三星マークにクルソン峡とあった。

何か謂われがある地名なのだろう。残念ながら私は「鹿児島県の地名」辞典しか持っていないので、それも宿題にしよう。それにしても会員たちは、川内川にゆかりの住民なのに誰も訪れたことがなかったと言う。今や残り少ない秘境の一つに違いないと思った。